

は地沈、是故に海水溢れあがる。又元氣降る時は地始のごとく浮む、是故に海水縮りて潮虚涸也。さるによりて潮晝夜に二度満、二度干る也。又大潮小潮にて遅速の有は、月の盈虚順環に依て替りあり、然れば天地の呼吸と見たる説是也。又一説には、余襄公海潮賦の序に、潮の消息は皆月に繋れり、月卯酉の間に望む時は、潮南北に平也。卯ノ方ハ東也、酉ノ方ハ西也、彼は満、爰は竭。竭トハ干リ往來絶す皆月にかゝるなりといへり、又王柏が造化論には、潮は陽の精にして、陰の依從ふ所なり、月は陰の靈たり、潮の附する所也。朔日十五日は、月の環ケツリ日に近し、故に月のめぐり早くして、潮の應ずる事もすみやか也。朔望の外は、朔トハ十五日ノ義、望トハ十五日ノ義、月も日に遠ざかるゆへに、月のめぐり遅くして、潮も又應ずる事小也といへり、是等の説おもしろし、又蠡海集に、凡日子に臨む時は、海水必起る、但上十五日は晝を潮とし、夜を汐とす、下十五日は、晝を汐とし、夜を潮とす、此時月皆子午の位也とあり、如是説まちクなりといへども、愚案には、天地の呼吸といへる説を可也とす、山海經、水經等に載するがごとき、海鱸の洞より出る時、潮干洞に入る時は潮満る抔といへるは異説怪誕にしていふにたらず、何ぞ大魚の出入によつて、天地の潮異なる事あらんや、五雜俎には、潮汐の説、誠に窮詰難し、然るに近浦、淺き岸のみ、其満干を見る、大海の體は、誠に一毫も増減なしと述たり、是をもつて見れば、彌天地の一呼一吸といふ理に過す。○中抔又潮の消息は、いつも東よりさす事は其理あり、夫百川の水は皆東に流れ趣く物なり、是其氣の至るに依て也、又東の方は地僻なる故也、潮は又東よりさす、是本に歸るの義也、抑東の方は卯辰の位にして、升氣の盛成方也、辰は龍變の郷也、是故に潮は東に起て西海に注ぐ、是本に歸する理也、

〔日本書紀神代〕海神乃延彦火火出見尊、從容語曰、天孫若欲還郷者、吾當奉送、便授所得釣鈎、因誨之曰、以此鈎與汝兄時、則陰呼此鈎曰貧鈎、然後與之、復授潮。満。瓊。及。潮。涸。瓊。而誨之曰、漬潮満瓊者、則潮。